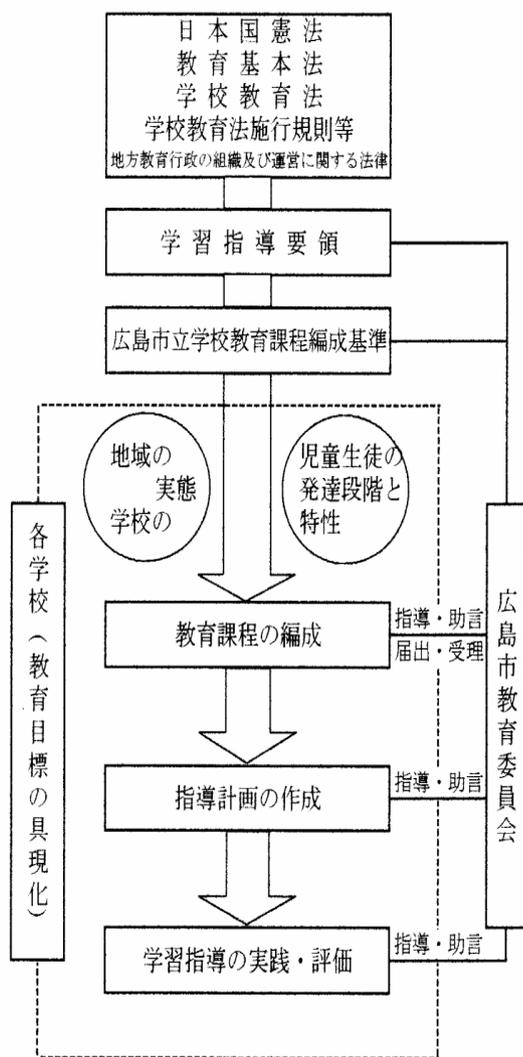


学 習 指 導

児童生徒が意欲をもって、生き生きと学習できる授業こそが、児童生徒の可能性を伸ばす場となります。
授業は、教職の要です。

教育課程の編成と指導計画の作成

学校教育は、人間性豊かな児童生徒の育成をめざして、組織的・計画的に行われるものです。そのために、各学校では、適切な教育計画を作成し実施することが必要です。その教育計画の中でも、児童生徒の指導に直接かかわる教育課程は、教育活動の根幹をなすものです。



1 教育課程

教育課程とは、学校教育の目的や目標を達成するために必要な教育内容を、児童生徒の心身の発達に並び、授業時数との関連において総合的に組織した学校の教育計画です。

すなわち、各教科、道徳科、外国語活動、総合的な学習（探究）の時間及び特別活動について、学年に応じて、その目標、内容、指導に充てる時間等を組織的に配列したものです。

2 教育課程編成の原則

教育課程の編成の基準である学習指導要領の総則に、教育課程の編成の原則として、次の三つのことが示されています。

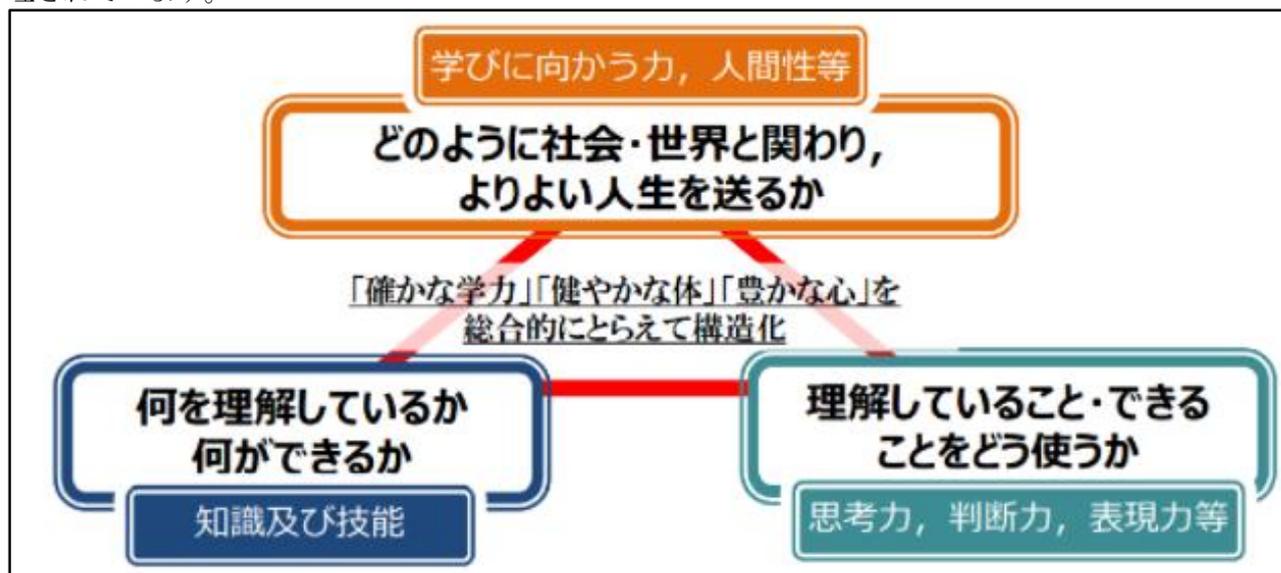
- 法令及び学習指導要領に示すところに従うこと。
- 学校や地域の実態を考慮すること。
- 児童生徒の心身の発達段階や特性などを考慮すること。

各学校においては、学校の教育目標の具現化を図るために、この原則のうえに、さらに創意工夫を加え、適切な教育課程を編成しなければなりません。

学校において教育課程を編成するに当たっては、学習指導要領及びその解説（文部科学省）、広島市立学校教育課程編成基準の中に示されている目標や内容、教育課程実施上の配慮すべき事項などについて、平素から研究することが必要です。

よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を学校と社会とが共有し、それぞれの学校において、必要な教育内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを明確にしながら、社会との連携・協働によりその実現を図っていくことが重要です。

また、学習指導要領では、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力を、ア「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」、イ「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」、ウ「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）」の三つの柱に整理するとともに、各教科等の目標や内容についても、この三つの柱で整理されています。



さらに、資質・能力の育成が実現されるよう、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、児童生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うこと、その際、各教科等の「見方・考え方」を働かせ、各教科等の学習の過程を重視して充実を図ることが示されています。

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた具体的な内容

- ① 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているかという視点。
- ② 子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているかという視点。
- ③ 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているかという視点。

3 指導計画の作成

教育課程を適切に実施するためには、それを一層具体化した指導計画が必要です。指導計画とは、各教科、道徳科、外国語活動、総合的な学習（探究）の時間及び特別活動のそれぞれについて、学年ごと、あるいは学級ごとなどに、指導目標、指導内容、指導の順序、指導方法、使用教材、指導の時間配当等を定めた、より具体的な計画です。これらの指導計画をさらに週案、日案のかたちに具体化し、より計画的・意図的な教育活動を行うよう努めていくことが大切です。

<指導計画の作成に当たって>

- 各教科等及び各学年相互間の関連を図るようにする。
- 系統的・発展的な指導ができるようにする。
- 各教科等の目標と指導内容のまとめ方などを工夫したり、内容の重要度や児童・生徒の学習の実態に応じて、その取扱いに軽重を加えたりして、効果的な指導を行うことができるようにする。
- 教材・教具の工夫や児童・生徒の理解度の把握などを通して、教えることと考えさせることの両者を関連付けるようにする。

授業づくりと授業研究

私たち教師は、子どもたち一人一人が学習内容をよりよく身に付けることを願いながら、授業を構想し、実践することを日々繰り返しています。

そして授業研究とは、そうした授業づくりの営みの中から自己の課題を見つけ、課題解決のための手立てを考え、再度実践するという省察のサイクルを意識的に繰り返すことだと言えます。

こうした授業研究は、授業力の向上につながることはもちろん、自身の授業観や教育観に向き合うきっかけともなるものなのです。

授業を構想する

「授業は生ものだ」とよく言われます。それは、授業というものが、教師や子ども、教材や教具、環境や時間などといった諸々の要素によって変化するものだからです。たとえ、同じ教師が、同じ子どもに、同じ教室で、同じ学習指導案により授業をしたとしても全く同じ授業を繰り返すことはできないのです。

だからといって成り行きに任せた授業を行っていたのでは、子どもたちに力を付けることはできません。子どもたちに力を付ける授業を実践するためには綿密な準備が必要です。特に以下の3点は授業を構想するうえで重要なポイントとなります。

- ① 教材を知る（教材観）
- ② 児童生徒を知る（児童生徒観）
- ③ 指導方法を検討する（指導観）

○ 教材を知る

1 教材とは

教材とは、指導の目標を達成するために選ばれた、学習者に指導内容を伝える際の材料で、代表的なものとして教科書、問題集、ワークシートなどがあります。どのようなものが適切な教材となるのかは、指導のねらいや子どもの実態などが大きく関係します。それは、同じ教材でも、一人一人の子どもによって、その内容の捉え方や理解の仕方などが異なるからです。この意味において、何を教材とし、その教材をどのように活用するのかということについて考えることは、授業を構想する際の重要な要件の一つとなります。



2 教材研究とは

授業を構想するに当たっては、学習指導要領の指導内容について、何をどの教材で教えるのかを明らかにすることが重要です。そのため教師は教材に対して深い理解をもたなければなりません。その意味において教材研究とは、教材にどのような特徴があるのか、何を教えることに適しているのか等を分析し、的確に捉えること（教材観をもつこと）だと言えます。

また、教える内容に適した教材を開発することも教材研究の一つです。教材分析だけでなく、教材開発も積極的に行い、創造的な授業を構想し、展開しましょう。

3 教材分析の主たる内容

教材分析の主たる内容【単元（題材）の目標・指導内容との関連から】

- (7) 単元（題材・主題）の系統的な位置付けを明確にする。
- (4) 単元（題材）の目標を設定し、指導内容を明確にする。



【単元（題材）の目標とは】

- 単元（題材）の目標とは、学校の教育目標や学年目標、教科目標を踏まえ、地域社会や家庭などの実態、子どもの経験などの実態を考慮したうえで、子どもが自ら考え、主体的に判断したり、表現したり、行動したりすることのできる資質や能力を目標として単元レベルで精選・重点化したものです。単元（題材）の目標を作成するにあたっては、学習指導要領の目標や内容、及び児童生徒の実態、前単元までの学習状況等を踏まえ、育成を目指す資質・能力の3つの柱で整理します。

知識及び技能 各教科等において習得すべき知識・技能や重要な概念等に関する目標です。学習の過程を通して個別の知識や技能を学びながら、そうした新たな知識・技能が既得の知識及び技能と関連付けられ、他の学習や生活の場面でも活用できる知識や技能として習得されることが重要です。

思考力、判断力、表現力等 知識及び技能を活用して課題を解決するために必要な力に関する目標です。「知識及び技能を活用して課題を解決する」という過程には大きく「物事の中から問題を見だし、その問題を定義し解決の方向性を決定し、解決方法を探して計画を立て、結果を予測しながら実行し、振り返って次の問題発見・解決につなげていく過程」、「精査した情報を基に自分の考えを形成し、各教科等の特質に応じて、文章や発話等によって表現したり、目的や場面、状況等に応じて互いの考えを適切に伝え合い、多様な考えを理解したり、集団としての考えを形成したりしていく過程」、「思いや考えを基に構想し、意味や価値を創造していく過程」の三つがあり、その違いに留意して育成を図ることが重要です。

学びに向かう力、人間性等 児童生徒一人一人がよりよい社会や幸福な人生を切り拓いていくために必要な主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や自己の感情や行動を統制する力、よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度等に関する目標です。こうした力を育んでいくためには、体験活動を含めて、社会や世界との関わりの中で学んだことの意義を実感できるような学習活動を充実させていくことが重要です。

- (9) 他学年、他教科等との関連を調べ、本単元（題材・主題）の指導目標を明確にする。
- (5) 指導内容相互の関連を明確にし、構造的に把握する。

こうした教材分析によって教師の内面にその教材で「教えるべきこと」が形となって表れます。これが「**教材観**」です。確固とした教材観は授業の中で教師の活動の支えとなります。自分に納得のゆくまで教材を分析しましょう。

※ 教材分析を行うに当たっては、**学習指導要領がその拠り所**となります。

※ 教材分析を行うことは、自己の「**教科に関する専門的知識を広げ、深める**」ことにつながります。



○ 児童生徒を知る

授業を構想するに当たっては、学習内容について、児童生徒にどのような実態があるのかを把握しておくことが重要です。児童生徒の既習事項や関心、課題等が異なれば、自ずと授業展開も変わってくるからです。

学習に対する児童生徒の実態を、次に示す観点などから把握するよう努めましょう。

関心意欲

- ・ その教科が好きか
- ・ 学習内容に興味があるか

理解度

- ・ その学習内容を学習するための基礎となる知識や技能が身に付いているか

既習事項

- ・ その学習に関連することがらについて、以前に見たり聞いたりしたといった経験があるか

その他

- ・ 自分で課題を解決するのが好きか、それとも問題の解き方を教えてもらうのが好きか
- ・ 日常生活習慣や学習習慣が身に付いているか
- ・ 学習などを支え合う仲間がいるか

など

子どもの「理解度」や「興味・関心」は多種多様で、一人一人全て違います。そうした子どもの様々な実態を捉えたものが「児童生徒観」です。授業を構想する段階で、一人一人の理解度や興味・関心を把握し、子どもの反応をより具体的にすることで、子どもの実態に応じた指導が可能になります。



○ 指導方法を検討する

どの教材を用いて、何を教えるのか、それに対して児童生徒にどのような実態があるのかが明確になることで、効果的な指導方法について検討することができます。

教材を構造的に把握し、教材をいつ、どのタイミングで提示するか、また、どのような活動で子どもの思考や表現を促し、教科で付けた力を獲得させることができるかなど、具体的な授業場面を念頭において授業の段取りや手立てを決めていく段階です。例えば次に示す点について検討します。

指導方法について検討すべき内容の例

- (ア) 身に付けさせたい力などを育成するために必要な活動を学習過程の適切な場面に位置付ける。
- (イ) 本時の学習の目標に沿って、学習活動の発展・深化が促進されるための主たる発問の構成をする。
- (ウ) 本時の学習の目標に沿って、学習の経過とまとめが明らかになるよう学習の展開過程に沿った板書の計画を工夫する。
- (エ) 児童生徒が自ら興味・関心・意欲をもって学習し、学びとっていくための学習活動が行われるよう配慮する。



また、授業において設定する学習の目標は、その単元で最終的に全ての子どもに到達させたい目標ですが、当然子どもには個人差があります。そこで、学習の目標をスモールステップに細分化し、子ども一人一人の実態に応じて、個々の目標を設定しておくことが、授業の展開において、それぞれの子ども

にどのように指導・支援するのかといった個に応じた指導を実践するうえでの礎の一つとなります。

【学習目標のスマールステップ化の例】

情報を収集・整理し、構成を工夫しながら、段落のまとまりを意識した文章を書くことができる。

- 情報を収集・整理することができる。（第1段階）
- 収集・整理した情報を文章にまとめることができる。（第2段階）
- 収集・整理した情報を、構成を工夫して文章にまとめることができる。（第3段階）

教材はもとより、教具や資料なども、子どもによってその理解が異なることが当然のこととして起こってきますし、その理解は、教師の解釈と一致するとは限りません。このような理解の違いは、多くの場合、子どもたちがこれまでにそれらの教材などとかかわってきた経験の違いに因ります。そこで、一人一人の子どもの生活の背景や思考の仕方を念頭におき、それぞれの子どもの立場に身を置いて、新鮮な目で教材などと対面し、それぞれの子どもが、教材をどのように理解するのかを教師が的確に把握することが大切です。そうすることが、授業の展開において、一人一人の子どもに柔軟に対応することにつながります。



授業というものは、教師や子ども、教材や教具、環境や時間などといった諸々の要素によって変化するものです。具体的な授業場面を念頭において、授業のねらいを子どもにどう追究させるか、指導の手立てや方法など、できるだけその場の状況に応じて柔軟に対応できるよう具体化することが大切です。これが、「指導観」の主要な要素となります。

授業の成否は、その根本において「教材観」・「児童生徒観」・「指導観」の深まりに比例するといっても過言ではありません。授業を構想する際には、次の2点を心掛けましょう。

- ① できるだけ複数の仲間と検討する機会をつくる。
 - ➡ 他者の見方や考え方を加え、新しい視点で授業を構想する場をもちましょう。
- ② 授業の実践から自己の課題を見だし、次の授業構想に生かす。
(継続的な探究)

- ➡ 授業は日々繰り返されるものです。授業づくりも、日々の授業の中から課題を発見したり、自己の力量に応じて改善の重点項目を設定したりしながら、長期的・継続的に行います。年に1回・2回は、自ら授業者となって研究授業を行うことで、より研究を深めることができるでしょう。



学習指導案を作成する

学習指導案は、授業を構想する中で具体化した「教材観」、「児童生徒観」、「指導観」に基づく指導と評価の計画などを整理し、まとめたもので、いわば授業を行うための計画書であり教師にとってのシナリオです。

教師は学習指導案を拠り所として授業を進めるということを考えると、学習指導案に記載される情報の質と量が、授業の成否の鍵となると言えます。「指導のねらいや教材の本質が正確に理解されているか」、「子どもの学習の状況などが十分に把握されるとともに、多様な子どもの姿が予想されているか」、そして、「多様な子どもの反応一つ一つに対する手立てが具体化されているか」などの項目に十分応えられる真の**授業の拠り所としての学習指導案**とするために、ここでは、授業の構想を通して得た情報を整理し、まとめるという観点から学習指導案の作成について考えてみましょう。

1 学習指導案作成の意義

学習指導案を作成することには、次のような意義があります。

- 授業者自身が、指導内容などを整理すると同時に、授業実施後、自己の指導を分析・検討し、授業の改善・充実を図ることができる。

学習指導案の分析・検討を通して、主題の意義、授業構成の理由、指導プランの改善点などを明らかにすることができます。



- 参観者が、授業のねらいや内容を把握し、授業を見る視点を明確にすることができる。



授業者が、授業のねらいに対して児童生徒の学習活動をどのように予想し、具体的にどのような手立てを講じているか、また、授業の中に評価がどのように位置付けられているかなどの手がかりが得られ、授業研究をより深めることに、つながります。

- 教育実践を記録、保存、活用、広報することができる。



2 学習指導案の内容・形式

学習指導案の内容や形式には、本来定型はありませんが、何をねらいとして、どのような内容を、どのような方法と展開・過程で指導するのかを示すために、次のような項目をあげて作成する場合があります。

- (1) 教材等の名称、指導者名、指導日時・場所、対象学年・学級、単元（題材・主題）名
- (2) 単元（題材・主題）について[教材観、児童生徒観、指導観]
- (3) 単元（題材・主題）の目標
- (4) 単元の評価規準
- (5) 指導と評価の計画（本時の位置付けを明記する。）
- (6) 本時の目標
- (7) 指導過程と評価（学習内容・学習活動、指導・支援の工夫、評価の観点、評価の方法など）
- (8) 板書計画



ア ○○科学習指導案（例）



学習指導案の
様式事例です

○○科学習指導案(例)

指導者 広島市立○○学校

教諭 ○ ○ ○ ○

- 1 日時・場所 令和○年○月○日（○） ○校時 ○○教室
- 2 学年・学級 ○年○組（○名）
- 3 単元(題材・主題)名 「○○○・・・」
- 4 単元(題材・主題)について

単元については、教材観、児童生徒観、指導観の三点について、授業者としての基本的な見解や考え及び指導方針などを記述する。

○ 教材観

記述のポイント	具体的な内容	拠り所となるもの
指導内容を明確に！	<ul style="list-style-type: none"> ○ 指導のねらい ○ 指導の内容 ○ 取り上げた教材の意義 ○ 指導内容の系統性 <p style="text-align: right;">など</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学習指導要領(解説) ・ 教科書 ・ 教師用指導書 ・ 参考文献 <p style="text-align: right;">など</p>

○ 児童（生徒）観

記述のポイント	具体的な内容	拠り所となるもの
子どもの実態を明確に！	<ul style="list-style-type: none"> ○ 指導内容に関する興味・関心、定着状況 ○ 学習活動の経験・志向 ○ 学習形態の経験・志向 <p style="text-align: right;">など</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 観察 ・ 意識調査、事前テスト ・ 児童（生徒）、他の教諭からの聞き取り など

○ 指導観

記述のポイント	具体的な内容	拠り所となるもの
指導の力点、方法を明確に！	<ul style="list-style-type: none"> ○ めざす子ども像 ○ 育てたい力 ○ 指導の工夫点 <p style="text-align: right;">など</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> 学習活動、場面設定、学習形態 発問、板書、使用機器 など </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教材観 ・ 児童生徒観

5 単元(題材・主題)の目標

学習指導要領を踏まえ、一単元の授業で児童生徒がどのように変容するのか、どのような知識・技能などを習得するのか、どのような能力を身に付けるのかなどを具体的に書く。

6 単元の評価規準 各教科・領域における評価の観点にしたがって単元のレベルの評価規準を書く。

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
〇〇〇・・・	〇〇〇・・・	〇〇〇・・・
学習指導要領との関連を明確にして書く。		

7 指導と評価の計画(全〇時間)

次	時	学 習 活 動	評価規準・評価方法
一 次	1	単元全体を通して学習がどのように展開するの か、また各時の学習が全体の中でどのよ うな位置付けなのかが分かるように、 各時で取り扱う学習内容を簡潔に書く。	単元の目標及び 評価規準を踏まえ、 評価場面や評価方 法等を示す。
	2		
次	3		
三 次	1 (本時)		

8 本時の目標

- 1単位時間の授業で児童・生徒がどのように変容するのか、どのような知識・技能などを習得するのか、どのような能力を身に付けるのかなど、本時に主としてねらう内容を具体的に書く。

9 本時の指導過程と評価

	学習内容・学習活動	教師の指導・支援	評価規準・評価方法
導 入 ↓ 展 開 ↓ ま と め	導入で提示した本時の学習のめあてについて、学習したことを児童生徒が自分なりの言葉でまとめられるような授業展開を書く。 教科や教材の特質及び本時分の指導内容などを考えるとともに、どのような学習過程を設定したらよいか、また、どのような学習活動が効果的であるかを考慮して書く。	児童生徒の側に立ち、教師の考慮すべき事項、資料の扱いなどについて具体的な手立てを書く。	本時の学習内容・活動に対する評価規準や方法を具体的に書く。

イ 国語科学習指導案（例）



学習指導案の
具体事例です

国語科学習指導案（例）

指導者 広島市立〇〇小学校
教諭 ○ ○ ○ ○

- 1 日時（場所） 令和〇年〇月〇日（〇）第〇校時（〇〇教室）
2 学年・学級 第2学年〇組（〇名）
3 単元の目標

(1)については、学習指導要領「2 内容」として示されている指導事項のうち、〔知識及び技能〕の中から本単元で取り上げる事項を記入する。
(2)については、学習指導要領「2 内容」として示されている指導事項のうち、「A 話すこと・聞くこと」、「B 書くこと」、「C 読むこと」の3領域の中から本単元で取り上げる事項を記入する。
(3)については、どの単元においても、当該学年の目標を記入する。

【単元の目標 例】

- (1) 共通、相違、事柄の順序など情報と情報との関係について理解することができる。〔知識及び技能〕(2)ア
(2) 時間的な順序や事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えることができる。
〔思考力、判断力、表現力等〕C(1)ア
(3) 言葉がもつよさを感じるとともに、楽しんで読書をし、国語を大切に、思いや考えを伝え合おうとする。
〔学びに向かう力、人間性等〕

- 4 単元（題材・主題）名 じゅんじょに気をつけて読もう「たんぼぼのちえ」

- 5 （単元の目標を達成させるための）言語活動

単元の目標を達成するために、適切な言語活動を設定する。具体的には、学習指導要領〔思考力、判断力、表現力等〕各領域における(2)言語活動例を参考にする。

【言語活動 例】

ア 事物の仕組みを説明した文章などを読み、分かったことや考えたことを述べる活動。

- 6 単元の評価規準とめざす児童（生徒）の具体的な姿

指導事項（単元の目標）を達成した時の子どもの姿について、より教材に即して、具体的に記入する。文末は、「～（しよう）している。」とすることが多い。

単元の評価規準とめざす児童（生徒）の具体的な姿

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
※ 文末を「～している」にする。	※ 冒頭には、当該単元や題材で指導する一領域を、「(領域名)において」と明記する。	※①粘り強さ ②自らの学習の調整 ③他の2観点において重点とする内容 ④当該単元（や題材）の具体的な言語活動
○ 共通、相違、事柄の順序など情報と情報との関係について理解している。(2)ア	○ 「読むこと」において、時間的な順序や事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えている。(C(1)ア)	○ 進んで(①)、時間的な順序や事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉え(③)、学習の見通しをもって(②)分かったことを文章にまとめようとしている(④)。
○ 時を表す言葉に着目し、たんぼぼの様子と理由が順序立てて説明されていることを捉えている。	○ たんぼぼの様子とその理由について、時間的な順序や事柄の順序などを考えながら読んでいる。	○ 時間的な順序や事柄の順序に気をつけたり、様子と理由の関係に気をつけて読書をしたりし、「〇〇のちえブック」にまとめている。

※ 評価規準の設定にあたっては、「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」（令和2年3月）国立教育政策研究所教育課程研究センターを参考とする。

7 単元(題材・主題)に関して

単元に関しては、児童(生徒)の状況教材の価値【教材観】、【児童生徒観】、指導の工夫【指導観】の三点について、授業者としての基本的な見解や考え及び指導方針などを記述する。

○ 教材の価値(教材観)

「3 指導事項」に関してのみ、教材の価値を記入する。例えば文末が「～にふさわしい教材である。」、「～しやすい教材である。」になるように記述すると教材の価値を明確にしやすい。



教材の価値【教材観】 例

○ 教材の価値

- 教材文「たんぼぼのちえ」：たんぼぼの花が咲いてから綿毛が飛んでいくまでの過程を、新しい仲間を増やすためのたんぼぼの「ちえ」として時間的な順序に従って分かりやすく説明している。順序については、段落の始めに時間やその推移を示す言葉が明確に示されている。また、それぞれの事実や現象の提示の後に、「～からです。」等の言葉で理由が述べられている。そのため、時間的な順序や事柄の順序を考えながら、文章の大体を捉えやすい教材である。
- 事物の仕組みを説明した文章などを読み、分かったことや考えたことを述べる活動。(「〇〇のちえブック」にまとめる)：作成した「〇〇のちえブック」を友達と読み合うという活動を設定することにより、児童が時間的な順序や事柄の順序などに気を付けて文章を読み、その上で、他の植物の「ちえ」についても調べてみたいという意欲を高めることができる。

○ 児童(生徒)の状況【児童生徒観】

「3 指導事項」に関して、児童(生徒)がどのような状況にあるのかを記入する。これまでの既習事項(教材)や達成状況等を記入する。



児童(生徒)の状況【児童生徒観】 例

○ 児童(生徒)の状況

- 事柄の順序など情報と情報との関係について理解すること：順序を表す言葉についての知識はあるが、自分から、それらの言葉に気を付けて読んだり書いたりする意識は薄い。
- 時間的な順序や事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えること：何がどんな順序で書いてあるかを意識して読んでいないため、書かれている内容を関係付け捉えたり、文章の大体を捉えたりすることができない児童もいる。

○ 指導の工夫【指導観】

児童(生徒)の状況と教材の価値を勘案した上での指導の工夫を書く。例えば、「～するために、〇〇と指導を工夫する。」という文型に合わせて記述すると指導の目的を明確にしやすい。



指導の工夫【指導観】 例

○ 指導の工夫

- 事柄の順序など情報と情報との関係について理解すること：段落の始めに時間やその推移を示す言葉が書かれていることに気付くよう、見つけた言葉を丸で囲むなど、視覚的に捉えられるようにする。また、見つけた言葉を使って、「〇〇のちえブック」をまとめることにより、時間や事柄の順序を表す言葉を使うよさを感じられるようにする。
- 時間的な順序や事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えること：挿絵と文章を線でつなぎながら読んだり、たんぼぼの様子を動作化したりすることにより、たんぼぼが変化している様子や、その理由を捉えられるようにする。

8 単元の学習と評価の計画(全10時間)

次	時	学 習 活 動	評価規準・評価方法
一 次	1	<div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; width: fit-content; margin: auto;"> 単元全体を通して学習がどのように展開するのか、また各時の学習が全体の中でどのような位置付けなのかが分かるように、各時で取り扱う学習内容を簡潔に書く。 </div>	<div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; width: fit-content; margin: auto;"> 単元の目標及び評価規準を踏まえ、評価場面や評価方法等を示す。 </div>
	2		
次	3		
三 次	1 (本時)		
	2		



単元の学習と評価の計画 例

次	時	学 習 活 動	評価規準・評価方法
一	1	「たんぼぼのちえ」を学習して分かったことを生かして「〇〇のちえブック」にまとめ、友達と読み合うことを知り、学習の見通しをもつ。 たんぼぼについて知りたいこと、調べたいことを出し合う。	[主体的に学習に取り組む態度] 観察・ワークシート ・学習の見通しをもち、調べたいことを出し合っている様子の確認
二	2	時を表す言葉に気を付けて読み、「たんぼぼのちえカード」にまとめる。	[知識・技能] 「たんぼぼのちえカード」 ・時を表す言葉とカードの並び順の確認
	3	2・3段落を読み、たんぼぼの様子と理由を「たんぼぼのちえカード」にまとめる。	[思考・判断・表現] 「たんぼぼのちえカード」 ・「たんぼぼのちえブック」 ・たんぼぼの様子とその理由についての記述の確認
	4	4段落以降を読み、たんぼぼの様子と理由を「たんぼぼのちえカード」にまとめる。	
	5	たんぼぼの「ちえ」は何のためにあるのか、考えたことを「たんぼぼのちえブック」にまとめる。 (本時)	
三	7	ほかの植物のちえについて調べ、「〇〇のちえブック」にまとめる。	[知識・技能] 「〇〇のちえカード」 ・時を表す言葉の記述の確認
	8		[思考・判断・表現] 「〇〇のちえブック」 ・自分が調べた植物の様子とその理由の記述の確認
	9	「〇〇のちえブック」を友達と読み合い、感想を交流する。	
	10	「〇〇のちえブック」をまとめるという学習を通して学んだことを振り返る。	

9 目標（二次6時（本時））

指導事項（単元の目標）を、より教材に即して、具体的に記入する。
文末は、「～できる。」とする。

本時の目標例

- たんぼぼの「ちえ」が何のためにあるのか、本文の叙述やカードにまとめたことを基に、自分の考えをまとめることができる。

10 学習展開（二次6時（本時））

学習活動	指導上の留意事項	評価規準・評価方法
教科や教材の特質及び本時分の指導内容などを考えるとともに、どのような学習過程を設定したらよいか、また、どのような学習活動が効果的であるかを考慮して書く。	児童（生徒）の側に立ち、教師の考慮すべき事項、資料の扱いなどについて具体的な手立てを書く。	本時の学習内容・活動に対する評価規準や方法を具体的に書く。

【本時の指導過程と評価例】

学習活動	指導上の留意事項	評価規準・評価方法
1 前時までの学習を振り返る。 ・ たくさん「ちえ」があったよ。 ・ じくやわた毛の「ちえ」がすごかったな。	○ 「たんぼぼのちえカード」にまとめた、たんぼぼの様子とその理由から、たんぼぼの「ちえ」の確認をする。	
2 本時のめあてを確認する。		
たんぼぼの「ちえ」は、なんのためにあるのか、考えたことをまとめよう。		
3 たんぼぼの「ちえ」が何のためにあるのか考えたことを「たんぼぼブック」にまとめ、意見を交流する。 ・ 種を遠くまで飛ばすため。 ・ あちらこちらに種を飛ばすため。 ・ いろいろな場所に種を飛ばして、新しい仲間をどんどん増やしていくため。 ・ たんぼぼにとって、たくさんの場所に種をちらす方が、いろいろな場所で咲くことが	○ 第10段落を音読し、「このように」「いろいろなちえ」が第9段落までの内容を指していることに気付くようにする。 ○ たんぼぼがどんな「ちえ」を使って、具体的にどのようなことをしてきたかを、これまでの学習でまとめた「たんぼぼのちえカード」を再度見直して確認させる。	A： 本文の記述やカードにまとめたことを関連付けて、たんぼぼの「ちえ」が仲間を増やすためにあることについて、自分が考えたことをまとめることができる。 B： 本文の記述やカードにまとめたことを基に、たんぼぼの「ちえ」が仲間を増やすためにあることについて、自分が考えたことをまとめることができる。 （「たんぼぼのちえブック」）

- 学習の展開における主要発問・指示を記入する。
- 展開部に、1～2か所の「やまば」を作るとよい。

- A・Bの状況を実現していると判断する際の具体の評価規準を記入する。

できる。そうしたら、たんぼぼの咲く場所が増えて、仲間もたくさん増えることになる。

4 他の植物にも「ちえ」があるのか考える。

- ・ 他の花も仲間を増やす「ちえ」があると思う。だから色々な場所に、花が咲いているのではないかな。
- ・ ほかの植物にも「ちえ」があるかもしれない。調べてみたい。

5 本時の学習を振り返る。

- ・ たんぼぼがこれだけの「ちえ」をつかっているのは、仲間を増やしていくためなんだな。

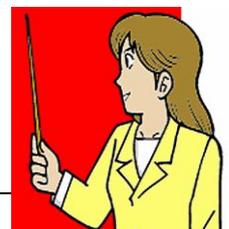
6 次時の学習の確認をする。

C: 「たんぼぼのちえカード」にまとめた、たんぼぼの様子とその理由の中から、理由に着目させ、たねを遠くまでとばすこと等、共通していることに気付くようにする。

○ たんぼぼの「ちえ」について気付いたことから、他の植物にも興味をもたせる。

○ 教室や図書室にある草花などの本を読んだことを生かして、他の植物の「ちえ」を探していくことを伝える。

○ Cと評価した児童(生徒)に対する手立ての例を記入する。



3 学習指導案作成に当たっての留意事項

学習指導案は、指導の全体像がより明確かつ分かりやすいものになるよう作成していくことが大切です。そのために以下のような点に留意する必要があります。

- 学習指導要領や各教科等の解説の内容及びこれまでの自校の指導を十分に踏まえたものにする。
- 教材研究を行い教材に精通するとともに、児童生徒の実態を把握する。
- 学習の成果を高めるために、毎時間の目標を焦点化し具体的なものにする。
- 指導過程は、児童生徒が課題意識をもって主体的に取り組めるものにする。
- 指導効果を確認するために、いつ、何を、どんな方法で評価するのか、評価計画を立てる。
- 個や集団の実態に応じた支援ができるよう、その具体的な手立てを考える。

※ 教育センターでは Web ページ上で、さまざまな学習指導案を公開(QR コード参照)するとともに、3階の図書資料室で校種・教科ごとに学習指導案をファイリングしています。教材研究などに是非御活用ください。



授業を展開する

1 授業を展開するとは

《授業を構想する》の冒頭でも述べましたが、授業は、教師と子どもが教材や教具、環境や時間などを媒介として、共に創り上げていくものです。授業を構想する段階で教材研究を深めたから、子どもの実態を十分に把握したから、あるいは納得のいく学習指導案を作成したからといって、授業が計画通りに進むとは限りません。実際の授業では、むしろ教師が思い描いた通りに進まないことの方が多いといっても過言ではありません。そのような中で、教師は指導の目標を達成すべく最善を尽くして授業を展開しています。

このことから、「授業を展開する」とは次のように捉えることができます。

【授業を展開するとは】

授業の構想（学習指導案）に基づきながらも、授業におけるその時々の子どもの学習の状況に応じてよりよく授業のねらいに到達するために、子どもの発言などにどのように対応するか、指導計画を変更するかどうか、変更する場合はどのように変更するのかといった判断を瞬時に言いながら、その時の自分の決定に従い授業を進めること。

そこで、授業を展開するためには、次のことが必要となります。

- 子どもの学習状況を見取る。
- 子どもの学習状況に応じて適切に対応する。



2 子どもの学習状況を見取る

(1) 子どもの学習状況を見取るとは

子どもの実態を把握することは授業を構想する段階で不可欠です。しかし、子どもの実態は、その時々状況によって変化します。そこで、実際の授業においては、事前の子どもの実態把握を踏まえつつも、その時々の子どもの状況を瞬時に、しかも的確に把握する（以下「見取る」という。）必要があります。「授業を展開する」うえで、子どもの学習状況を的確に見取ることは最も重要な要件の一つとなります。

子どもを見取る視点としては、次のようなものがあります。

【子どもの学習状況を見取る視点とその内容例】

- 理解の状況 … 理解の程度はどのくらいか。どのように理解しようとしているか。
- 思考の状況 … 自分なりに思考しているか。どのような思考の仕方をしているか。
- 技能習得の状況 … 技能がどこまで身に付いているか。どのように技能を身に付けようとしているか。
- つまずきの状況 … つまずいているかどうか。何につまずいているのか。
- 学習意欲の状況 … 学習したいという気持ちをもっているか。



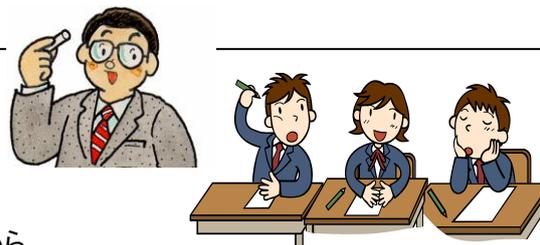
一人一人の子どもの学習状況を的確に把握するためには、子どもの様子や活動の結果だけで判断するのではなく、その過程や背景を探るようにしましょう。

(2) 子どもの学習状況の見取り方

① 子どもの学習状況を見取るための手立て

授業においてその時々の子どもの学習状況を見取るための手立てとしては次のようなものがあります。

- 「発言やつぶやき」などから
- 「観察したこと」から
- 「小テストの結果」から
- 「ワークシートや学習プリント等の記述内容」から
- 「机間指導等により聞き取りしたこと」から など



② 子どもの学習状況の記録の仕方（「座席表」を活用した記録方法の例）

授業で見取った子どもの学習状況を記録する方法の一つに「座席表」の活用があります。子どもの授業中の活動の様子や変容の姿など、気付いたことを「座席表」に簡単に記録することにより、一人一人の子どもの学習の状況をよりの確に見取ることができます。

C君はどこでつまづいているのかな？

B君はどのように計算してこうなったんだろう？

何も書いていない。Fさんならできるはずなのに。どうしたんだろうか？

長さ $\frac{2}{5}$ m のリボンを3人で分けると1人分は何mですか



A 式だけ書いている	B $\frac{2}{5} = 2 \div 5 = 2.5$ 	C 分からない 	D
E 数直線をかいて3等分しようとしている	F 記述なし	G 3で2が割れなくて悩んでいる	H
I かけ算の反対だから	J $\frac{2}{5} = \frac{6}{15}$ で、3に分けると $\frac{2}{15}$	K $\frac{2}{5} \div 3 = \frac{2}{5 \times 3} = \frac{2}{15}$	L
M	N	O	P

※ 見取りと見取りの手立て

- C → 発言やつぶやきなどから
- G → 観察したことから
- A、B、E、F、I、J、K → ワークシートや学習プリントなどに記載された内容から



あらかじめ「座席表」に予想される子どもの反応や一人一人の指導のねらいなどを記入しておくことで、子どもの学習の状況を見取る視点が明確になるとともに焦点化され、子どもの状況をより鮮明に見取ることが可能となります。さらに、授業後に、子どもの学習状況を把握したり、次時の指導の手立てを考えたり、成果を見取ったりするための貴重な資料となります。

3 子どもの学習状況に応じて適切に対応する

(1) 子どもの学習状況に応じた適切な対応とは

授業における子どもの学習状況を見取ったら、それぞれの子どもの学習状況に応じて適切に対応しなければなりません。適切に対応するためには、**子どもの学習状況の的確な見取り**と、**それぞれの子どもの状況に応じた最も有効な手立ての検討**が必要となります。手立ては、授業の構想段階において予想した子どもの反応に対し事前に準備しているものもありますが、予想外の子どもの反応に対しては、教師自身がもっている知識・技能の中から有効な手立てとして瞬時に選択しなければならないものもあります。教師は、選択したいくつかの手立ての中でどれが最も有効かを判断し、子どもに対応しているのです。その際、子どもの見取りが的確でなければ、適切な手立ては講じられません。

このように考えると、授業の展開においては、「どの子どもにどの手立てを講じるのか」、「思い描いたように進まない授業に対し、どのような手立てを用いて、どのような方向に進めていくのか」を判断することが、子どもの学習状況の見取りとともに教師の重要な活動となります。

(2) 授業の展開に必要な手立て

子どもの学習状況に応じて必要となる手立てには、次のようなものがあります。

- | | | | |
|--------|---------|-----------|-------------|
| ① 机間指導 | ② 言葉かけ | ③ ほめる・しかる | ④ 指示 |
| ⑤ 発問 | ⑥ ノート指導 | ⑦ 板書 | ⑧ ICTの活用 など |

① 机間指導

机間指導は、子どもが自分自身の学習のつまづきを発見したり、思考を広げたりする際の支援となるもので、教師にとって、個に応じた指導を行うための重要な活動となります。机間指導をする際には、一人一人の学習状況を見取り、状況に応じた指導を行いましょ。

机間指導は漠然と行ったのでは効果がありません。次に示すようなはっきりとしたねらいをもって行うことが大切です。

【机間指導の目的】

○ 一人一人の学習状況を把握する。

- ・学習課題を理解しているか。
- ・どのような解決の方向に向かっているか。
- ・学習活動の進み具合はどうか。



○ 一人一人の学習状況に応じた指導や言葉かけを行う。

- ・学習課題を明確にする。
- ・学習課題に向けて、解決方法の方向付けをする。
- ・学習が思うように進んでいない子どもにはヒントを与え、学習の進んでいる子どもには発展的な課題を与える。
- ・学習意欲が見られない子どもには、ほめる、しかる、励ますなどの言葉かけをすることにより子どもの思いを把握し、適切に対応する。

【机間指導をするときの留意事項】

- 机間指導中に全員に示すべきことに気付いたときは、子どもの活動を一度中断（保留）し、全員に徹底するように話す。
- 個別指導をするときは、子どもに近寄り、目の高さを同じくらいにして、小声で話しかけるなどの配慮をする。
- 指導の効率と徹底を図るための工夫をする。例えば、小さな紙を用意して、気付いたことをメモして渡す方法もある。
- 子ども一人一人の学習を妨げないよう静かに歩く。

② 言葉かけ

子どもへの言葉かけは、子どもの思いや考えを知り、子どもへの支援をするための重要な手立てとなります。言葉かけには次のような種類があり、子どもの学習状況に応じて適切な言葉かけをするようにしましょう。

【言葉がけの種類】

【認める・ほめる・励ます】

例：「よくがんばったね」、「やったね」、「いいぞ、その調子でがんばれ。」

【自信をもたせ、立ち直りのきっかけを与える】

例：「間違いなど恐れず、自分の考えたように、やっごらん。」
「間違っていると気付いたことも勉強だよ。」

【安心感を与える】

例：「先生も〇〇が分からずに苦労したんだ。」、「今度はこうやってみるときっと分かるよ。」

【次の学習の見通しをもたせる】

例：「先生と一緒に〇〇にチャレンジしてみよう。」
「ここまでできるようになったね。次は〇〇をめざすといいね。」



- 子どものプラス面や成長面に注目しましょう。
- 結果ばかりでなく、子どもの進歩や成長のプロセスにも目を向けましょう。

③ ほめる・しかる

ほめ方・しかり方には、いろいろな方法がありますが、明確なねらいで、子どもの立場に立ち、教育的な配慮に基づいて行うことが大切です。子どもが、ほめられることによって自分の言動に意欲と自信をもつことができたり、しかられることによって発奮し、それが成長への新たな出発点につながったりするような、子どもの心に響くほめ方・しかり方をしましょう。

【ほめるとき・しかるときの留意事項】

【教育的なほめ方】

ほめられたい、認められたいという気持ちは、だれにもあります。子どもが意欲をもって取り組むことができるよう認めたり励ましたりすることが大切です。

- 教師が期待した望ましい答えだけを受け入れるのではなく、個性的な考え方についてもその着想や独創性を認めるとともに、学習が深まることに生かす。
- よく努力したときは、その根気強さや集中力を認める。
- 約束を守ったときは、その努力と責任感の強さを認める。

【教育的なしかり方】

しかられることはだれでも嫌なことです。しかるときは、一人一人の子どもをよく理解し、発達段階に応じて教育的な配慮を十分にすることが必要です。

- しかる原因となった言動とその理由を明確に伝え、子どもが納得できるようにする。
 - 感情的なしかり方や、くどくどと、しつこいしかり方をしないようにする。
 - 例えばルールを守らなかつたり人に迷惑をかけたたりしたときは、その言動の背景を十分見極めたうえで指導し、子どもが自ら反省できるようにする。
 - 他の子どもと比較してしかったり、不公平なしかり方をしたりしない。
- ※ ただし、いかなる場合においても体罰は決して教育的とはいえず、許されない。

④ 指示

子どもが主体的に関わる授業を展開するためには、子どもが教材に対してどのように関わったらよいのかという学習の方法を十分理解させておく必要があります。そのために、教師は、子どもに対し学習の方法を明確に示さなければなりません。この働きをするのが指示です。その指示が、子どもにとって、何をどのようにすればよいのかが理解できるとともに、自主的に教材に関われるものになるよう、教師は、指示の内容や指示の仕方を十分吟味しておくことが大切です。指示をするに当たっては次のことに留意しましょう。

【指示をする際の留意点】

【指示の意味（目的）を説明する】

例：「説明をよく聞いてください。」ではなく、
「今日はおもしろいことにチャレンジしてもらいますから、説明をよく聞いてください。」

【具体的で分かりやすい指示をする】

例：「がんばって早くやりましょう。」ではなく、「3分間でできるかチャレンジしてみましょう。」
「できるだけたくさん書きましょう。」ではなく、「5つは書けるように頑張ってみましょう。」

【一時に一事を指示する】

例：「ノートに計算練習をしましょう。終わったら先生に提出してください。その前にロッカーの整頓をしましょう。全部終わった人は本を読んでおいてください。」



「まず、ロッカーの整頓をします。済んだら席に着きましょう。」
確認後「ノートに計算の練習をします。10問済んだら先生に提出してください。」
板書「静かに教科書〇ページを読みましょう。」



【指示が徹底していないと判断したときは、全体に対して指示をし直す】

例：「みなさん、聞いてください。説明が十分に伝わっていないようなので、もう一度説明します。」

【場合によっては、前向きな表現で効果が上がる指示を工夫する】

例：「時間になるまでやりなさい。」ではなく、「あと5分、最後までチャレンジしてみましょう！」
「もう少し工夫しなさい。」ではなく、「なかなかいいね。もう少し工夫すれば、もっとよくなるはずだよ。」

⑤ 発問

発問は、子どもにとって学習意欲を高めたり思考を深めたりするなどの重要な働きがあります。単に、何を発問するのかその内容が重要なだけではなく、その内容をどのような声（声の張り、大きさ）で、どのような表情で、どのような態度で、どのような速さやタイミングで子どもに伝えるのが重要です。

【学習の過程における発問の機能と発問例】

<導入時の発問>

【学習内容に興味・関心が高まるような発問】

例：「これを見て(聞いて)何か気付いたこと、不思議だなと思うことはありませんか。」
「自分たちの身のまわりにこれと同じようなこと、似たようなことはありませんか。」
「今までに同じような(似たような)経験をしたことはありませんか。」

【何を学習するのがはっきりするような発問】

例：「どんなことが分かり、どんなことが分からない(はっきりしていない)ですか。」
「今日はどんなことについて考えたり、調べたりしてみたいですか。」

<展開時の発問>

【課題解決への見通しがもてるような発問】

例：「どんなことが分かれば解決できそうですか。」、「どんな方法で解決できそうですか。」
「どんな結果になりそうですか。」

【学習したことを整理し、まとめることができるような発問】

例：「自分が考えたことを友だちに分かってもらうためにはどうすればいいですか。」

【思考を広げたり深めたりすることができるような発問】

例：「他の条件でも同じような結果になると思いますか。」

<終末時の発問>

【学習したことをまとめ、自覚できるような発問】

例：「今日の学習でどんなことが分かりましたか。」
「今日の学習でどんなことがまだはっきりしていませんか。」

【学習したことを生かし、発展的なことをしてみたいくなるような発問】

例：「今日の学習をもとにして、他に考えてみたい(やってみたい)ことは何ですか。」

【自分自身の頑張りや進歩についての気づきを自覚できるような発問】

例：「自分が頑張ったと思うことは何ですか。」
「今日の学習で新しく分かったことやできるようになったことは何ですか。」

友だちの意見と自分の意見を比べて、似ている(異なっている)ところはどんなところですか。



ここにあげた例は、その一部です。発問の目的や子どもの学習の状況などに
応じて、問い方を工夫しましょう。

【発問をするときの留意事項】

- あいまいな発問は子どもが混乱する原因となるので、具体的で分かりやすい発問を用意する。
- 一つの発問を言い換えたり繰り返したりすると子どもの思考が妨げられることがあるので、発問の量と質を吟味する。
- 子どもが考えたり判断したりできるよう、子どもの学習の状況に即した発問を用意する。
- 一問一答に終わるのではなく、多様な思いや考えを引き出すことができる発問を用意する。
- 子どもが答えにくい発問だと判断したときは、視点を変えたり、ヒントを添えたりするなどして、考えやすいものとする。(一時保留にし、次の活動を終えた後に、再び同様の発問をすることも考えられる。)
- 子どもの思いや考えの真意がはっきりしないときは、必要に応じて問い直す。
- 子どもの思いや考えがどちらかというとな面的であったり、安易に一つの方向に向かっていたりしているときは、疑問を投げかけたり、反対意見や対立意見を示したりするなど、子どもの思いや考えをゆさぶる発問を行う。
- 挙手や発言がしにくいなどの心理的な抵抗が見られるときには、意図的に指名をし勇気付けるなどして抵抗感を取り除き、学習に参加しやすい雰囲気をつくる。
- 子どもの思いや考えは、比較したり関連させたりして学習成果を高めることに生かす。

⑥ ノート指導

ノートは、子どもにとっての学習の履歴です。学習過程を振り返ったり、理解の定着を図ったりするなどいろいろな働きをもっています。日々の学習に活用できるよう、ノートの使い方について継続的な指導と評価をするようにしましょう。

ノートを使うことには次のようなよさがあります。

【ノートの機能】

- **整理の機能** … 学習内容を振り返ることにより、理解の定着を図る。
学習内容を要約したり、関連付けたりすることにより、思考の方法を習得する。
- **練習の機能** … 文字・用語・計算等の確実な理解や習熟を図る。
- **表現の機能** … 考えたり、感じたりしたことを書くことにより、思考活動を活性化する。
- **保存の機能** … 学習に必要な資料を貼り付けたり、自分が調べたこと、分かったことなどを記録したりすることにより、学習内容を取り出せるようにする。



教材や学習の内容、学習の形態などに応じてノートを作成することが大切です。

<学習課題について調べた理科のノートの項目例>

- | | |
|---------------------|-----------------------|
| (1) 気付いたこと、疑問に思ったこと | (5) 調べた結果 (事実) |
| (2) 調べること | (6) 事実から考えたこと、思ったこと |
| (3) 自分の予想 | (7) もっと調べたいこと、確かめたいこと |
| (4) 調べ方 | (8) 感想 |

⑦ 板書

板書には、子どもの知的好奇心を刺激したり、思考や理解を深めたりする働きがあります。板書の機能を十分に生かすとともに、効果的な学習が行えるよう、板書の計画を立てておきましょう。

【板書をするときの留意事項】

- 板書事項を精選し、内容の構造化を図ることで、子どもが学習事項の全体像をつかめるようにする。
- 板書内容に子どもの発言やつぶやきを取り上げ、それぞれの考えをはっきりと分かるように示す。
- 板書構成に子どもを参加させ、学習意欲を高めるようにする。
- 筆順・字形・文字の大きさなどに注意して、正確に書く。
- 板書の位置や構成を工夫して書く。
- 図解や図式、色チョークの使用により視覚的效果を高めることで、理解を助けるよう工夫する。
- 発問しているときや子どもが他の活動をしているときは、板書を避ける。
- 掛け図や掲示物など、教材・教具と効果的に組み合わせて活用する。
- 直線や図形などを書く場合は、原則として定規等を使う。

⑧ ICTの活用

教科等の指導におけるICT活用の意義とその必要性については、学習指導要領の総則に「情報活用能力の育成を図るため、各学校においてコンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を活用するために必要な環境を整え、これらを適切に活用した学習指導の充実を図ること」と示されています。

子どもの学習の効果を高めるためには、実物投影機やコンピュータ等のICT機器を電子黒板等と組み合わせて、効果的に活用すると子どもの学力向上に役立てることができます。

そのためには、各時間の指導のねらいや子どもの実態に応じて題材や素材を教師が十分吟味して選ぶことやタイミングよく教師が提示したり、提示した写真や映像などを指し示しながら発問、指示や説明をしたりすることが大切です。また、ICTを活用する場面と活用しない場面を効果的に組み合わせることも大切です。ICTの活用例として次のような学習場面、活用例が考えられます。

学校におけるICTを活用した学習場面					
A 一斉学習		B 個別学習		C 協働学習	
<p>種別や学習等を拡大・縮小、画面への書き込み等を活用して分かりやすく説明することにより、子どもたちの興味・関心を高めることが可能となる。</p> <p>A1 教師による教材の提示</p> <p>画像の拡大提示や書き込み、音声、動画などの活用</p>		<p>デジタル教材などの活用により、自分の疑問について深く調べることや、自分に合った進度で学習することが可能となる。また、一人一人の学習履歴を把握することにより、個々の理解や関心の程度に応じた学びを構築することが可能となる。</p> <p>B1 個に応じた学習</p> <p>一人一人の習熟の程度に応じた学習</p> <p>B2 調査活動</p> <p>インターネットを用いた情報収集、写真や動画等による記録</p>		<p>タブレットPCや電子黒板等を活用し、教室内の授業や他校・他市の学校との交流学習において子供同士の意見交換、発表などお互いを高め合う学びを通じて、思考力、判断力、表現力などを育成することが可能となる。</p> <p>C1 発表や話し合い</p> <p>グループや学級全体での発表・話し合い</p> <p>C2 協働での意見整理</p> <p>複数の意見・考えを議論して整理</p>	
<p>B3 思考を深める学習</p> <p>シミュレーションなどのデジタル教材を用いた思考を深める学習</p>		<p>B4 表現・制作</p> <p>マルチメディアを用いた資料、作品の制作</p> <p>B5 家庭学習</p> <p>情報端末の持ち帰りによる家庭学習</p>		<p>C3 協働制作</p> <p>グループでの分担・協働による作品の制作</p> <p>C4 学校の壁を越えた学習</p> <p>遠隔地や海外の学校等との交流授業</p>	

引用「教育の情報化に関する手引き」

各教科等での活用例

文部科学省「StuDX Style」<https://www.mext.go.jp/studxstyle/index2.html>



学習を評価する

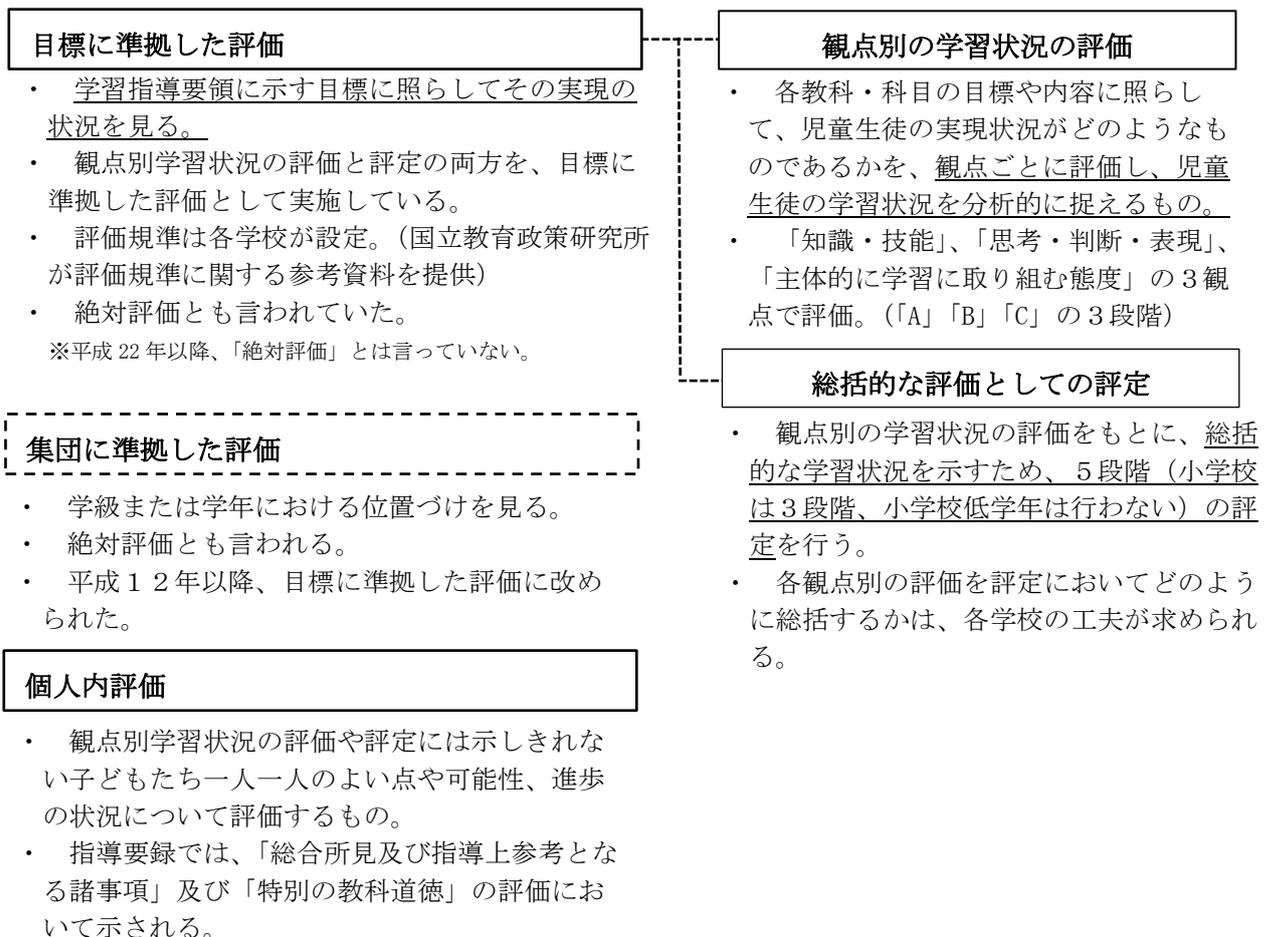
学習評価は、学校における教育活動に関し、児童生徒の学習状況を評価するものです。「指導生徒にどういった力が身についたか」という学習の成果を的確に捉え、教師が指導の改善を図るとともに、児童生徒が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにするために、学習評価の在り方は重要であり、教育課程や学習・指導方法の改善と一貫性のある取組を進めることが求められます。

○ 児童生徒の評価

授業では、学習内容を指導するだけでなく、児童生徒自身が「どういった力が身についたか」を振り返ることができるよう適切な評価をすることが重要です。

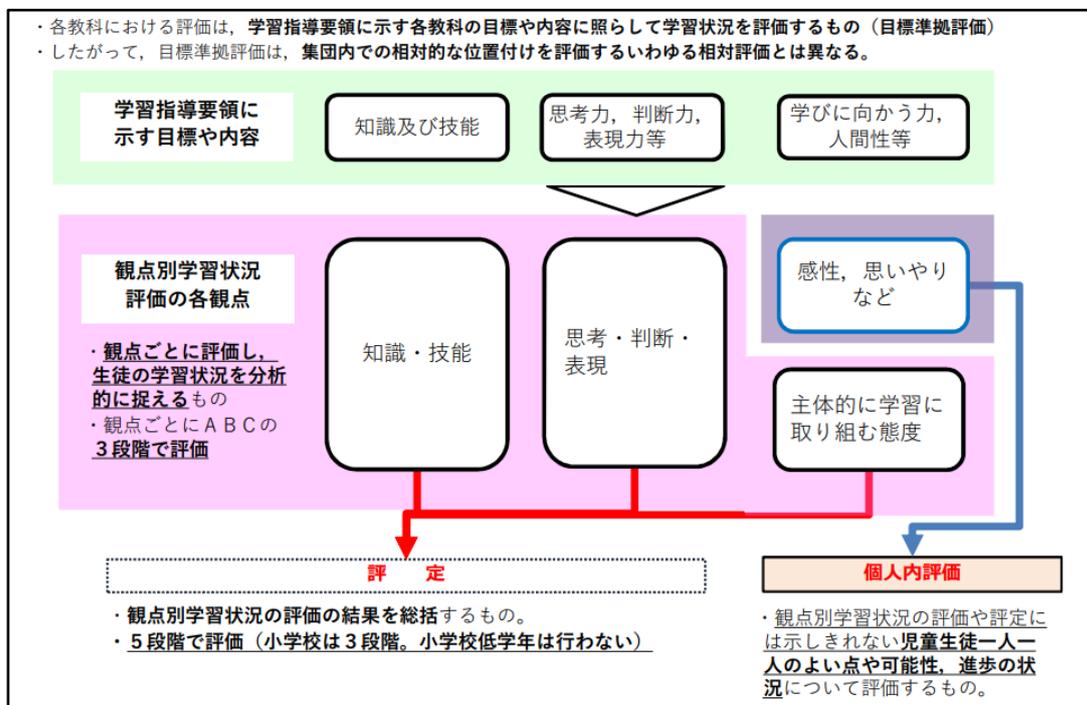
教師が児童生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し、児童生徒が学習したことの意義や価値を実感できるようにすることで自分自身の目標や課題をもって学習を進めていけるようになるのです。

1 評価の種類及び内容



2 各教科における評価の基本構造

学習指導要領では、目標及び内容が資質・能力の3つの柱で整理されていることを踏まえ、各教科における観点別学習状況の評価の観点については、「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の3観点に整理されています。



3 評価の方法

(1) 評価の具体的方法

評価方法（例）	評価の観点		
	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
ペーパーテスト	○	○	
実技テスト	○		
作品（絵、作文など）	○	○	
レポート	○	○	○
ワークシート	○		
ノート			○
観察（発表や話合いの様子など）	○	○	○
面接（インタビュー）	○	○	○
質問紙（アンケート）	○	○	○
児童生徒の自己評価	○		○
児童生徒による相互評価	○		○

※ 表内の○は、特に適していると思われるもの

(2) 評価を行うときの留意事項

- ① 各教科の学習活動の特質、評価の観点や評価規準、評価の場面や児童生徒の発達段階に応じて、観察、児童生徒との対話、ノート、ワークシート、学習カード、作品、レポート、ペーパーテスト、質問紙、面接などの様々な評価方法の中から、その場面における児童生徒の学習の状況を的確に評価できる方法を選択する。
- ② 児童生徒の学習状況を適切に評価し、評価を指導の改善に生かすという視点を重視し、教師が指導の過程や評価方法を見直して、より効果的な指導が行えるよう指導の在り方について指導改善を図る。
- ③ 指導の目標及び内容と対応した形で評価規準を設定することや評価方法を工夫する。
- ④ 学校としての評価の方法、方針、体制、結果などについて、校長のリーダーシップの下、日頃から教師間の共通理解を図る。
- ⑤ 保護者や児童生徒に対して、学習評価に関する仕組み等について事前に説明したり、評価結果の説明を充実したりするなどして学習評価に関する情報を積極的に提供する。

(評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料より)

○ 指導の評価

学習の評価は、児童生徒の学習の状況を把握し、児童生徒の学習の改善に結び付けてはじめて意味のあるものとなります。ですから、評価は、児童生徒の学習成果や学習活動について行うだけでなく、学習活動を提供し、組織し、促進する教師自身の指導についても行う必要があります。

日々の授業の中では、教師が思い描いていたとおりに児童生徒の学習が展開するとは限りません。たとえ教師にとっては思い描いたとおりに進まなかった授業であったとしても、児童生徒にとってはよく分かる充実した授業になっていることもあります。授業における教師のどのような指導が児童生徒の学習にとって効果的だったのか、あるいはそうでなかったのか、また、それはなぜなのかという背景を明らかにしていくことが、教師自身の授業づくりに対する自己のものの見方や考え方を広げたり深めたりすることになり、その後の授業改善につながります。

学習指導のより一層の充実をめざし、自分自身の授業評価表を作成し、自己評価したり、他の先生方に評価してもらったりするなどして、授業改善のための取組をしていくことが大切です。

1 授業記録による振り返り

授業を客観的にとらえ、授業の事実に基づいた分析を行い、適切な評価をするためには、授業記録が重要な振り返りの材料となります。1回限りの授業において、授業の分析などに必要となる内容を記録するために、記録方法を具体化しておきましょう。

<授業記録の準備の手順>

① 何を記録するか決めましょう。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・教師の授業展開（説明・発問・指示 など）・教師の行動（板書・机間指導・表情・声の大きさ など）・子どもの情意面（表情・態度・意欲・しぐさ など）・子どもの反応（発言・つぶやき・質問内容 など）・子どもの達成状況（評価規準に照らした達成状況 など） |
|--|

② 記録（行動観察、参加観察 など）を分担しましょう。

③ 記録する内容に応じて、適切な記録機器を選択しましょう。

④ 分析・診断の視点に対応する授業記録（観察記録用紙）を作成しましょう。

授業を振り返るための方法として、授業記録や動画撮影等による記録を活用することが有効です。

2 授業評価表

授業を振り返るための方法として、授業記録や動画撮影等による記録を活用するほか、授業評価表を用いて、教師自らが自己評価を行う方法もあります。教師が折に触れ自分自身の授業を自己評価することで、授業実践における課題が明確になるなど、授業改善への視点を得ることができます。

授 業 評 価 表

学 年	年 組	日 時	月 日 ()	校 時
教 科	単元(題材・主題)名			
項 目	評 価 の 具 体 例			← (十分に) 達成の度合 5 4 3 2 1
事 前	① 本時の目標は、学習指導要領に則り、単元構成や児童生徒の実態に照らし適切である。			_ _ _ _
	② 学習のねらいに迫る主要発問を準備している。			_ _ _ _
	③ 個に応じた指導のための学習活動や学習形態を考えている。			_ _ _ _
	④ ワークシートなどの教材・教具を適切に準備している。			_ _ _ _
	⑤ 児童生徒の誤答やつまづきを多様に予測している。			_ _ _ _
	⑥			_ _ _ _
発 問 ・ 指 示	① 全員に聞こえる声で明確に発問・指示をした。			_ _ _ _
	② 具体的で分かりやすい発問・指示をした。			_ _ _ _
	③ 様々な考えを引き出したり、思考を深めたりする発問をした。			_ _ _ _
	④			_ _ _ _
板 書	① 授業内容を構造的に表現し、分かりやすく板書した。			_ _ _ _
	② 文字の大きさや漢字の筆順も適切で、ていねいに板書した。			_ _ _ _
	③ 児童生徒の発言やつぶやきを取り上げ、それぞれの考えが分かるように板書した。			_ _ _ _
	④			_ _ _ _
展 開	① 発問や指示をした後の児童生徒の様子を的確に見取り、その状況に応じて学習を進めた。			_ _ _ _
	② 専門性が求められる質問などにも適切に対応した。			_ _ _ _
	③ 机間指導などで児童生徒一人一人の学習状況を把握した。			_ _ _ _
	④ 一部の児童生徒に偏ることなく発表を求め、学習を進めた。			_ _ _ _
	⑤ 児童生徒の意欲を喚起し、学習する雰囲気が高めるよう気を配った。			_ _ _ _
	⑥ 学習した内容がよく分かり、思考を促進するようなノート指導を行った。			_ _ _ _
	⑦ 学習の振り返りと次時の学習の見通しをもたせるようなまとめを行った。			_ _ _ _
	⑧			_ _ _ _
評 価	① 児童生徒の学習上の成果や課題・つまづきなどを明確に把握し、適切に支援を行った。			_ _ _ _
	② 授業中の児童生徒の学習状況に基づいて、必要に応じて指導過程を修正した。			_ _ _ _
	③ うなずいたり、ほめたりしながら、個に応じた評価を具体的に行った。			_ _ _ _
	④			_ _ _ _
時 間	① 時間に遅れず授業を開始した。			_ _ _ _
	② 授業時間内に学習のまとめを終えることができた。			_ _ _ _
	③ 児童生徒が発言・質問・活動する時間を適切に確保した。			_ _ _ _
	④			_ _ _ _
態 度 ・ 姿 勢	① 授業内容にふさわしい服装などで授業に臨んだ。			_ _ _ _
	② 児童生徒一人一人を大切に言葉遣いをするよう心がけた。			_ _ _ _
	③ 児童生徒の目を見て話すなど、児童生徒との信頼関係づくりに配慮して学習を進めた。			_ _ _ _
	④ 学習態度や学習規律の指導について、細やかに配慮し毅然とした態度で臨んだ。			_ _ _ _
	⑤			_ _ _ _
感 想				

※ 各項目の「評価の具体例」の空欄には、自分なりの観点をたてて評価してみましょう。